

2018 年秋季特別展Ⅱ

もも
百の手すさび
近代の茶杓と数寄者往来



図1 益田鈍翁作 茶杓 歌銘「年暮」
昭和 13 年(1938)
展示(第三章):全期間

MIHO MUSEUM (滋賀県甲賀市信楽町田代桃谷 300 館長:熊倉功夫)は、
2018 年(平成 30 年)10 月 20 日(土)~12 月 2 日(日)までの期間、
秋季特別展Ⅱ「百の手すさび 近代の茶杓と数寄者往来」を開催いたします。
明治維新後、新生日本の経済、文化を牽引した益田鈍翁(孝)などの数寄者たちの交流を、
自作の茶杓を通して紐解いていきます。

* * * 一般の方のお問い合わせ先 * * *

MIHO MUSEUM TEL.0748-82-3411 URL. <http://miho.jp>

開催主旨

茶杓とは、茶器に入った抹茶を掬い、茶碗に入れるための茶道具の一種です。一見とてもシンプルな一片の匙にも関わらず、「茶杓は人なり」と称せられ、古くから大切に扱われてきました。そのシンプルな形ゆえに、作る人の美意識や人柄が映し出されているからでしょう。

明治維新以後、近代日本の政財界を牽引した名だたる実業家たちは、その美意識と財力によって美術品を蒐集し、茶の湯の場において数寄者として親交を深めました。その交流の証の一つに自ら作った茶杓を贈りました。

本展は、池田瓢阿氏（竹芸家）の監修のもと、千利休や小堀遠州など近代茶杓の礎となった近世（安土桃山時代～江戸時代）の茶杓を通じた交友も回顧しつつ、三井財閥を支えた益田鈍翁を中心に、高橋箒庵、小林逸翁など東西の近代数寄者約30名が作った茶杓を展覧します。また、近代に活躍した上村松園などの女性のほか、谷崎潤一郎や川喜田半泥子など文化人・芸術家らによる茶杓もあわせて合計120余点を展示し、なぜ茶杓を作るのか、その魅力とは何かを探ります。あわせて、茶杓以外の自作道具やゆかりの蒐集品約80点も展覧し、当時の数寄者の茶の湯の一端をご覧ください。

明治以降、新生日本の経済だけでなく、文化面においても新たな風を巻き起こした偉人たちの存在を、茶杓を通じてたどります。

※ 会期中一部展示替えあり



図2 沙門地獄草紙 解身地獄
鎌倉時代（益田鈍翁旧蔵）
MIHO MUSEUM蔵
展示(第二章):11/13～12/2

次回予告

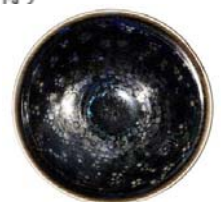
春季特別展「大徳寺龍光院 国宝曜変天目と破草鞋」(仮称)

2019年3月21日(木・祝)～5月19日(日)

大徳寺の塔頭のひとつ、龍光院に伝わる曜変天目、密庵威傑、竺仙

梵僊の墨蹟(以上国宝)や、柿栗図(伝牧谿筆)、山水図(伝馬遠筆)、

油滴天目(以上重文)などの名宝が、慶長11年(1606)の創建以来
四百年の時を越え、初めて一挙公開されます。



国宝「曜変天目」

開催概要

- ◇ 展覧会名：秋季特別展Ⅱ「百の手すさび^{もも} 近代の茶杓と数寄者往来」
- ◇ 英語タイトル：Autumn sessionⅡ：
“100 Modern Tea Scoops: Connoisseurship and Society”
- ◇ 開催期間：2018年（平成30年）10月20日（土）～12月2日（日）
- ◇ 会場：MIHO MUSEUM
〒529-1814 滋賀県甲賀市信楽町田代桃谷 300 TEL.0748-82-3411
- ◇ 主催：MIHO MUSEUM、京都新聞
- ◇ 後援：※滋賀県、※滋賀県教育委員会、※NHK大津放送局、※BBCびわ湖放送、
※エフエム京都 ※は予定
- ◇ 監修：池田 瓢阿（いけだ・ひょうあ 竹芸家）
- ◇ 担当学芸員：小山 由貴子（MIHO MUSEUM 学芸員）
- ◇ 展示構成：第1章 近世の茶杓 贈り筒を中心に
第2章 益田鈍翁 近代数寄者の大立者
第3章 益田鈍翁を取り巻く関東・中京における数寄者の茶杓
第4章 女性による茶杓
第5章 関西における数寄者の茶杓
第6章 文化人の茶杓
- ◇ 展示総数：約200点（予定・一部展示替えあり）
- ◇ 入館料：一般1100円、高・大生800円、小・中生300円
【20名以上の団体は各200円割引】
- ◇ 開館時間：午前10時～午後5時 【入館は午後4時まで】
- ◇ 休館日：毎月曜日

イベント & プログラム

- ◇ 講演会① 「茶杓について」（仮称）
講師：池田 瓢阿（いけだ・ひょうあ 竹芸家 本展覧会監修者）
11月10日（土）14:00～15:30
- ◇ 講演会② 「近代数寄者とは」（予定）
講師：熊倉 功夫（くまくら・いさお MIHO MUSEUM 館長）
11月17日（土）14:00～15:30
- ※①②とも ●会場：南レクチャーホール ●定員：100名
●予約不要：当日美術館棟受付にて整理券配布 ●参加無料（入館料要）
- ◇ ワークショップ 展覧会中、毎週「茶杓削り体験」を予定。※詳細は決定次第HPにて発表。
 - ①気軽に体験！
 - 開催日：10/25、11/1、8、15、17、29 ※11/29は午後のみ開催
 - 時間：10:30～12:30 14:00～16:00 ●場所：MIHO MUSEUM 北館（回廊）
 - 対象：中学生以上 ●定員：各回10名 ●参加費：1000円（入館料別途要）
 - ②本格的に体験！
 - 講師：池田泰輔氏（竹芸家） ●開催日：11/24（土）
 - 時間：10:30～12:30 14:00～16:00 ●場所：北館回廊 ●対象：18歳以上
 - 定員：各回20名 ●参加費：8000円（入館料別途） ●筒は別料金（希望者のみ）
 - 持ち物：エプロン、手の保護のための手袋 ●定員になり次第締め切り
- ①②とも ●事前予約要：お申し込みはメール・お電話・ファクシミリにて
●お問い合わせ：教育普及 TEL.0748-82-8036/FAX.0748-82-2834

展示される茶杓の作者一覧			
--------------	--	--	--

千利休	三井華精	新島八重	吉川英治
古田織部	三井高棟	上村松園	高原杓庵
千宗旦	三井泰山	柳原白蓮	堀口捨己
小堀遠州	三井小柴庵	堀越宗圓	田山方南
片桐石州	三井高昶	村山玄庵	小森松菴
松浦鎮信	馬越化生	嘉納鶴翁	板谷波山
松平不昧	野崎幻庵	住友春翠	川喜田半泥子
益田鈍翁	高橋箒庵	小林逸翁	橋本関雪
愈好斎聴松	藤原暁雲	野村得庵	朝倉文夫
安田松翁	松永耳庵	大谷心斎	堂本印象
平瀬露香	畠山即翁	杉木普斎	中川一政
石黒况翁	横井夜雨	近衛文麿	荒川豊蔵
益田非黙	富田宗慶	水谷川紫山	加藤唐九朗
益田紅艶	高橋蓬庵	北村謹次郎	岡橋三山
江月宗玩	森川如春庵	正木直彦	河瀬無窮亭
三井高福	大田垣蓮月	谷崎潤一郎	金重陶陽

※ほぼ展示順（一部展示替えあり）

展示構成と代表作品

第一章 近代の茶杓 贈り筒を中心に

桃山時代の天正年間（1573–1591）、千利休によって「侘び」の美意識を軸とした茶の湯が大成され、茶人自らが作った茶杓が新たな価値をもちはじめます。以来、茶杓には作り手の思いが込められ、その美意識を象徴する道具として浸透していきました。本章では、利休時代からはじまる近世の茶人たちが残した茶杓の中から、交流のわかる贈り筒（送り先の宛名が書付されている筒）の添った茶杓を中心にご覧いただきます。

図3 千利休作 茶杓 銘「タイエ様参」
安土桃山時代 北村美術館蔵
展示:10/20~11/11



第二章 益田鈍翁 近代数寄者の大立者

明治維新以後、近代日本の政財界を牽引した実業家たちは、茶の湯を新たな形で再興します。彼らは古社寺や諸大名家から流出した重宝類を蒐集し、それらを茶の湯の場に取り込んでいきました。その中心人物の一人に、創成期の日本経済を動かし、三井財閥を支えた益田鈍翁（孝）（1848-1938）がいます。

本章では鈍翁の茶杓とともに、ゆかりの品々を展示し鈍翁の美意識の一端を垣間見ていただきます。あわせて、近代の黎明期に活躍した数寄者たちと鈍翁の二人の弟の茶杓をご紹介します。



図4 益田非黙作 黒茶碗 銘「翁さひ」
展示:全期間

第三章 益田鈍翁を取り巻く関東・中京における数寄者の茶杓

近代数寄者の牽引者である益田鈍翁は、近世の茶人がしたように、自ら作った茶杓を茶友に贈ります。また、それに影響された他の数寄者も同じように自ら茶杓を作ったため、近代において個性豊かな茶杓の世界が広がりました。

本章では鈍翁の主人ともいふべき三井家の人々の茶杓のほか、近代数寄者の茶の湯を押し広めた高橋箒庵、茶の湯界の風雲児森川如春庵など、鈍翁と親交のある関東と中京の数寄者たち16名が作った茶杓に加え、ゆかりの茶道具を展示いたします。

図5 高橋箒庵作 茶杓 銘「雲龍」
展示:全期間



第四章 女性による茶杓

本章では、江戸時代末期から昭和時代に生きた5名の女性による茶杓をご紹介します。立場や生き方は違いますが、女性の権利が弱い時代に男性の世界であった茶の湯を嗜んだ彼女たちの茶杓は、強くしなやかに生きた女性の象徴といえるでしょう。

図6 上村松園作 茶杓 銘「蜻蛉」
展示:全期間



第五章 関西における数寄者の茶杓

関西にも著名な数寄者が少なからず存在し、彼ら主催の茶会が数多く開催され、互いの茶を楽しんだようです。

本章では、関西を中心に活躍した住友春翠など9名の数寄者の茶杓をご覧いただくとともに、昭和6年12月15日、小林逸翁が永田町の自邸に高橋箒庵を招いた茶会の道具組を展示いたします。



図7 住友春翠作 茶杓 銘「破窓」
大正10年(1921)
展示:全期間

図8 小井戸茶碗 銘「六地藏」
朝鮮時代 泉屋博古館分館蔵
展示:全期間

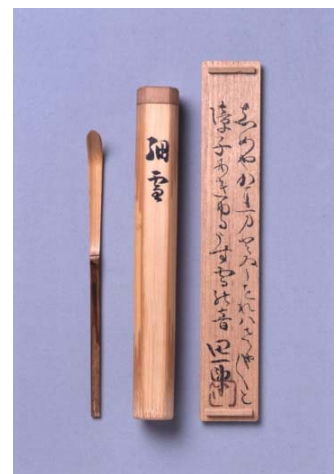


第六章 文化人の茶杓

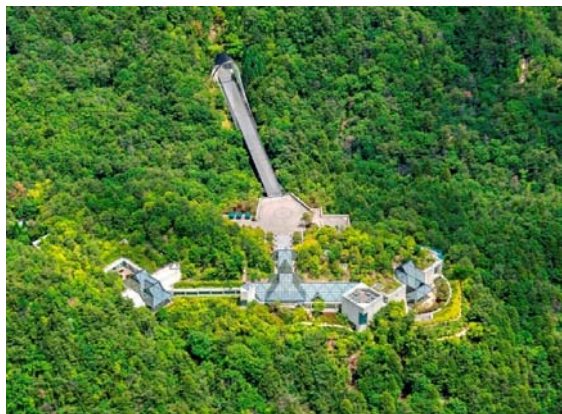
近代において、茶の湯は日本を代表する一つの文化として評価されはじめ、文化人の中には流派の家元や数寄者と交流し、茶の湯を嗜む人々もでてきました。

東京美術学校(東京藝術大学の前身)の校長を務めた正木直彦は日本美術の一つとして学術的に茶道具を評価し、自身の茶杓を人に贈っています。また、小説家の谷崎潤一郎は茶杓に銘を認め、陶芸家の板谷波山も茶杓を作り贈っています。本章で紹介する学者や画家など15人の茶杓は、余技と一言で片づけるには惜しいほどの個性にあふれています。

図9 谷崎潤一郎作 茶杓 銘「細雪」
逸翁美術館蔵
展示:全期間



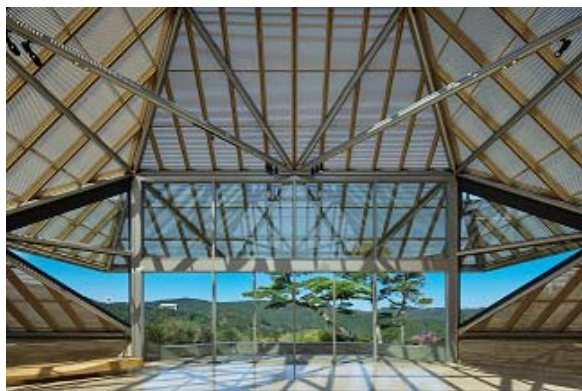
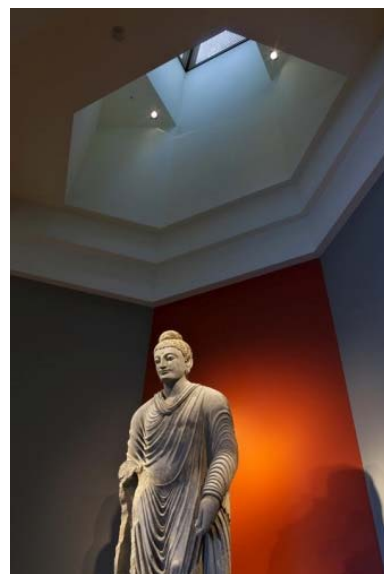
MIHO MUSEUM について



■ MIHO MUSEUM は 1997 年 11 月に、琵琶湖の南、自然豊かで風光明媚な湖南アルプスの山中に誕生しました。

建築設計は、フランス・ルーヴル美術館のガラスのピラミッド、ワシントンのナショナルギャラリー東館、北京、香港の中国銀行ビル等で世界的に知られる I.M.Pei 氏によるものです。設計のテーマは「桃源郷」。東晋の詩人、陶淵明の「桃花源記」にある仙境の楽園－桃源郷の物語を、構想・設計・建設に 6 年の歳月をかけて、信楽の地に実現したのです。

■ 所蔵品は、エジプト、ギリシア・ローマ、西アジア、中央アジア、南アジア、中国、朝鮮、古代アメリカなどの古代美術と、仏教美術や、茶道美術をはじめ、絵画、漆工、陶磁器などの日本古美術をあわせて、約 3,000 件からなり、季節により国内外からの出陳を加えて、常時 250～500 点を展示しています。その質の高いコレクションは、ニューヨーク・メトロポリタン美術館、ロサンゼルス・カウンティ美術館、オーストリア・ウィーン美術史美術館、オランダ・ライデン国立古代博物館などで公開され、海外からも高く評価されています。



■ 美術館棟は「自然と建物と美術品」「伝統と現代」「東洋と西洋」の融合をテーマに、建築容積の 80% 以上を地中に埋設し、建物の上にも自然を復元しています。幾何学模様が織りなすガラス屋根からは、明るい太陽の光が降り注ぎ、訪れる人をやさしく包み込んでくれます。

■ 施設としては、2つのホール、オリジナルグッズをそろえた 3 つのショップ、無肥料・無農薬の厳選食材を使用したレストラン、喫茶各 1 店舗があります。レストラン別室では、団体様用の昼食も提供しています。

MIHO MUSEUM は 30 万坪の敷地に、信楽の大自然、建築、美術品、すべてが融合した感動の空間です。



報道関係者の本件に関するお問い合わせ先

MIHO MUSEUM 学芸部 広報

TEL 0748-82-3411 FAX 0748-82-3414 URL <http://miho.jp>
〒529-1814 滋賀県甲賀市信楽町田代桃谷 300